

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	有井 晴香
論文題目	エチオピア農村に生きる女性のライフストーリー —近代学校教育の受容と解釈—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、エチオピア南西部マーレ地域の農村に暮らす女性が、様々な社会変容を経験していくなかで自らの人生をどのように解釈して語るのかを、彼女らのライフストーリーの分析を通して明らかにした。社会の変容のなかでも、現代のアフリカ農村に暮らす女性たちのライフコースに大きな影響を与えていると考えられる近代学校教育の普及に注目し、就学という経験が彼女たちの生活・人生のなかでどのように受容され位置づけられているのかを考察した。</p> <p>ライフストーリーとは、当事者が現在の視点から過去の経験を意味づける行為であり、そこには人生の解釈が含まれている。</p> <p>第1章では、エチオピアの教育政策とマーレ地域における学校教育の普及状況を、文献および公的資料に基づいて概観した。つづく第2章では、調査対象としたエチオピア南部諸民族州南オモ県マーレ地域について、主要な生業、慣習的な世帯構成、女性のライフサイクル、近年のプロテスタント信仰の広まりなどについて民族誌的な記述をおこなった。</p> <p>第3章では、マーレ地域の農村において、学齢期を超過して就学したり、復学したりした経験をもつ3人の女性に対する聞き取りから、それぞれの女性が就学や復学という選択に至る経緯を示した。3人の就学が可能となった背景として、現行の教育システムと、女性の就学に対する社会的承認および個人の状況的な意志がうまくかみ合ったこと、また、女性をとりまく親密な間柄のなかで関係の調節がおこなわれたことを指摘した。</p> <p>第4章では、成人教育をうけたあとに小学校に入学したふたりの既婚女性のライフストーリーを検討した。結婚選択と出産などを含む結婚後の生活について、彼女たちが周囲の人々との関係性を調整しながらいかに学校生活を営んでいるかを示した。マーレ地域の女性が、成人教育に参加することを通じて、単に識字能力を得ているだけでなく、学校教育を地域の人びとに浸透させていく役割を果たしていることを明らかにした。</p> <p>第5章では、8人の娘の母である女性のライフストーリーを検討することを通して、学校教育の浸透が、学校で「学ばなかった」女性の生き方にどのように作用するのかを明らかにした。この女性が、人生の語りを通して、学校で「学んだ」娘＝「男のような女」と、「学ばなかった」自分＝「愚かな女」とを対比させ、二項対立的な女性性を表現していたことを見いだした。しかし、対立的な表現を用いて語られる女性性は、それぞれが両義的で、それゆえに分断できるものではなく、両者が絡み合って彼女の生き方に埋め込まれている。その場の文脈にあわせて自在に自らの人生の提示の仕方を変容させる彼女の語りは、よりよい生活や人生を求める一貫した営みの一側面であると分析した。</p>			

第6章では、就学経験を経て、理想の職業ととらえられている小学校教諭となった女性のライフストーリーを分析した。学校の教師がいわゆる「近代的」な生活を送る象徴的存在であるという自己認識をもちながら、同時に、農村の中で暮らす「伝統的」な生活から抜け出せない側面を強く意識し、両者の板ばさみとなっている状況を描いた。

終章では、マーレの女性たちが自らの生き方をどのように捉え、そのなかで学校教育をどのように位置づけているのかについて議論した。マーレ社会において、女性は「愚か (*boozza*)」というカテゴリーと結び付けられており、そのようなジェンダー化された二項対立があるところに近代学校教育が導入されたことによって、新たに「学ばなかった人」と「学んだ人」という区分が生じた。女性たちのライフストーリーの語りには、そのような二項対立的なカテゴリーに対して彼女たちがどのように交渉しえたのか、自らの解釈を示す内容が含まれていた。

マーレ女性の人生において、学校教育は自らの生活、人生を客観視するための尺度であり、社会的通念に対する抵抗の手段のひとつであった。その一方で、二項対立的な社会的通念を強化し、それとのずれから生じる葛藤をあらたに生みだしている側面があることを指摘した。そうしたなかで、学校教育という新たに導入された装置を用いて、女性たちは社会的に付与されるカテゴリーを対照し、再解釈することを通して、自らの生き方を肯定する物語として自分の人生を構築していくのである。